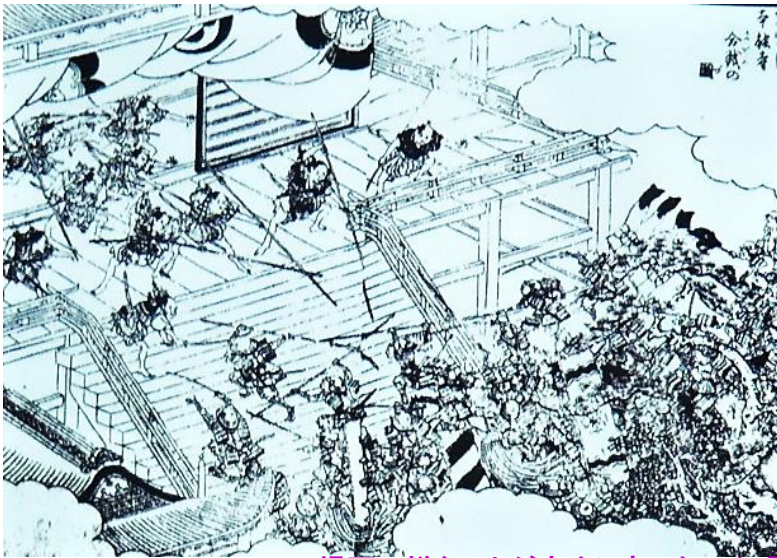


本能寺の変 その最大の謎に迫る ～光秀はなぜ？

本能寺合戦の図

絵本太閤記より



この場面の様なことが本当にあったのか？

講師 市橋 章男 氏

1954年岡崎市生まれ。國學院大學で史学を専攻。新編岡崎市史調査員。教職員退職後、ふるさと岡崎にかかわる歴史・人物の著作活動を始める。2005年、岡崎長善館で「おかざき塾歴史教室」を主宰開講。2017年、タニザワ大学研修センターで「岡崎ふるさと歴史講座」を開催。元二松学舎大学大学院研究員。全国歴史研究会特別会員。

小説やドラマなどで再現される本能寺の変は、実は江戸時代以降の創作によるところがほとんど。実際の当時の資料を見ながら、本能寺の変の真実に迫る。

11:54 開講
市川副会長

〈市橋講師〉



お招きありがとうございます。作左の会でお話するのは4回目になりますが、この会の皆さんは大変熱心に取り組んでおられます。主題とは離れますが、作左の会ですから、まず、ゆかりの「犬頭神社」についてお話しします。犬頭神社の入口の石の鳥居は岡崎の指定文化財です。この鳥居は花崗岩ではありません。笏谷石（しゃくだにい）です。また、（作左ゆかりの地・越前）丸岡城の木造天守（「現存十二天守」の一つ）の屋根は笏谷石の瓦です。

笏谷石は福井市内の足羽山（あすわやま）で採れる越前青石とも呼ばれるブルーグリーンの石で、濡れると青みがさえる特性がある。福井の銘石。火山礫凝灰岩。柔らかくて加工しやすく、吸収性が高く凍害や雪の重みにも耐えられる。（土瓦は寒冷地で割れやすい）



笏谷石は丸岡から運ばれたのではないでしょう。鳥居は、岡崎城主本多康重が奉納した（1605年・慶長10年建築）ものですが、丸岡城は作左の息子 本多成重（幼名：仙千代）が城主だった城です。作左との関わりを感じます。丸岡と岡崎のつながりを作左が作っている。素晴らしいことです。

犬頭神社と笏谷石についての関連情報については、作左の会ホームページ・地域の歴史を探索会・糟目犬頭神社を参照。



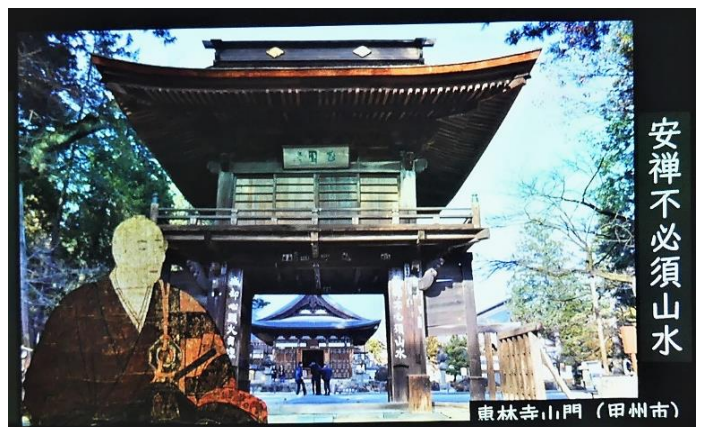
余談を
もう少し

麒麟ビールの麒麟をデザインした山本鼎は岡崎出身の画家です。

織田信長の花押は、麒麟を表しています（抽象形）。

「安禅必ずしも山水を須いず、
心頭を滅却すれば火も自ら涼し」

恵林寺の焼き討ち…本能寺の変にもつながる



恵林寺

市橋講師取材時撮影

安禅不必須山水

恵林寺山門（甲州市）

快川国師（国師＝高僧に、朝廷から贈られた称号）

天正10年(1582)

甲斐国の武田氏を滅ぼす
信長の天下統一は目前
3か月後に「本能寺の変」

天正10年(1582)頃の信長の勢力図

1582年6月 秀吉
高松城攻めの最中

1582年 本能寺の変
6月2日

1582年6月 四国派兵途中

1582年3月 天目
山の合戦で滅亡

原図出典：小学校の歴史クイズ | キッズマングローブ

資料選択：編集部

◆信長は、天正10年には、中央の支配権をほぼ確立していた。(3月、天目山の合戦で武田氏を滅ぼす)

甲府の恵林寺(えりんじ)を焼く ～快川(かいせん)国師の焼死

◆武田の残党を皆殺しにしろという信長の命で、織田信忠(信長の子)勢は武田残党の追討を開始し、残党が逃げ込んだ恵林寺を包囲、残党を引き渡すよう要求したが、寺側〔快川国師=快川紹喜(かいせんじょうき)〕は拒否しました。残党の引渡しを拒んだことで恵林寺の僧たちは山門に集められて焼き殺されました。

◆恵林寺の再建された山門には、下記の言葉が記されています。

右の柱に、「安禅不必須山水」(安禅は必ずしも山水をもちいず) 「安禅」=坐禅と同意味

心しずかに坐禅するには必ずしも山水が必要なわけではない。

左の柱に、「滅却心頭火自涼」(心頭を滅却すれば 火も自ずから涼し) 頭と却=助字。特に意味はない。

無念無想の境地に達すれば、火もまた自ずと涼しく感じるものだ。

快川国師が燃え盛る三門の上で最後に残した言葉として伝わっています。

◆快川国師は、美濃の出身で、俗姓は土岐氏です。明智光秀も同じく美濃国の土岐氏一族明智氏の出自。

明智光秀について ～最初の大名～

◆光秀は、斎藤道三→朝倉義景→足利義昭と仕え、織田信長にも重用され、足利(将軍の近習的な役割)・織田の両方に仕えていた期間がありました〔両属の家臣〕。

◆その後、光秀は天皇の信頼も得て、信長とは微妙な距離があったと考えられます。

◆1571年(元亀2年)、織田信長の命で、比叡山焼き討ちの中心実行部隊となり武功をあげました。その他数々の功績が認められ、信長より近江国滋賀郡(現在の滋賀県大津市)5万石を与えられ、坂本城を築城します。光秀は、織田家中で初めて『一国一城』の主「大名」になったのです。

(豊臣秀吉が長浜に領地を与えらるのは、2年後の1573年)

◆坂本城は比叡山の麓にあり、比叡山を見張る目的がありました。坂本城の石垣は穴太衆(あのうしゅう)の築いた野面積み(自然のままの石を積み上げる)の石垣です。(穴太衆は坂本穴太出身の石工集団。古墳や寺院などの石垣づくりを任されていた。作る石垣は、現代のコンクリートに匹敵するとも言われるほど強固なもの)残っている石垣は今でも見事なものです。

◆光秀は、比叡山焼き討ちの際に焼失した、坂本の西教寺(天台真盛宗の総本山)の再興にも力を注ぎました。

◆1578年、亀山城築城。1579年丹後国平定(織田家の支配下に)。丹波国(29万石)を与えられました。

光秀

永6)
明智氏の出自

朝倉義景、将軍
仕え、織田信長
仕える(両属)
主を経て、丹波
し、亀山城主も



市橋講師



謎の一 光秀は信長を恨んでいたのか？

光秀は信長に感謝していた。

◆光秀と信長の関係は悪かったのでしょうか？
「明智家法」に書かれていることからすれば、悪い関係であったとは考えられません。

本能寺の変=怨念 ではないのです。

(『明智家法』より)

自分は石ころのような身分から信長様にお引き立て頂き、過分の御恩を頂いた。
——(中略)——
一族家臣は子孫に至るまで信長様への御奉公を忘れてはならない

本能寺の変（通説）

家康接待役解任

怨念説

↓
丹波国取り上げ

危機説

↓
愛宕山連歌会

野心説

どれも無いのではないが。

- ◆本能寺の変の通説はあり得ないものです。テレビなどでは、この通説で描かれます。大変怖いことです。
- ◆NHKの大河ドラマ「麒麟がくる」放映を機に、明智光秀・本能寺の変に関する新たな資料を入手しましたが、これを見て大変びっくりしました。その資料を基に、本能寺の変の謎を解いていきたいと思います。

「本能寺の変」のあらまし

光秀接待役解任→丹波国領地取り上げ（丹波・近江志賀郡の領地から、まだ敵国である出雲・石見へ国替の通告）→秀吉の救援軍→愛宕山連歌会→丹波亀山城から京都への進軍→本能寺襲撃→二条御所襲撃

愛宕山連歌会の、光秀の句は本能寺の変の意思表示か？

解釈



愛宕神社（京都市左京区）愛宕山の御坊威徳院で連歌会は催された

◆明智光秀は、本能寺の変の直前に愛宕山で連歌会を開きました。その時光秀が詠んだ句（発句）が、本能寺の変の予告だと言われています。

愛宕山百韻
時は今雨が下しる五月かな 光秀
土岐は今天が下知る五月かな
水上まさる庭の夏山 行祐
花落つる池の流れを 紹巴
せきとめて
風に霞を吹き送るくれ 宿源
「惟任退治記」より

「とき」→「土岐氏=光秀の出身」

「あめ」→「天=天下」

「下知る」→「命令」

土岐氏出身の明智光秀が「天下」に向かって命令をくだす＝「ワシが天下人になる！」

◆しかし、この場で軍事機密をいうでしょうか？普通は考えられません。「惟任退治記」は秀吉が側近に書かせた本です。秀吉の都合のいいような内容に作られているのではないのでしょうか。

謎の二

「敵は本能寺にあり！」を宣言したの？



旧山陰道 老の坂付近



◆信長から西国出陣を命じられた光秀は丹波の亀山城から出陣しました。沓掛で、西国へ向かうのなら右へ曲がり南下ですが、その分かれ道で「敵は本能寺にあり！」と全軍に号令したと言われています。

◆行軍した山陰道は狭い道です。狭いので1列になります。1万5千人の列は15kmの列になります。全軍に号令はできません。

1万5千の兵、全軍への指示は
ほぼ不可能
兵たちは何も知らされず京に入った!?

■元本能寺は1433年建立→1536年焼失。1545年四條西洞院に再建→1582年本能寺の変で焼失。1591年秀吉の命で現在の地へ移転。



ルイス・フロイスのいた所

真実を示す様々な資料

「是非に及ばず」とはどういう意味？

「信長公記」に記された本能寺の変

- 『信長公記』（しんちょうこうき）は織田信長の一代記。著者は信長旧臣の太田牛一。

…太田牛一はその場に居なかった…

信長も、御小姓衆も、当座の喧嘩を下々の者共仕出（して）し候と、おぼしめされ候のところ、一向さはなく、ときを声を上げ、御殿へ鉄炮を打ち入れ候。是れは謀叛か、如何なる者の企てぞと、御諒のところに、森乱申す様に、明智が者と見え申し候と、言上候へば、是非に及ばずと、上意候。

『信長公記』

- ◆「是非に及ばず」＝“明智では仕方ない”という諦めの言葉だとして、その言葉を最後に切腹したと扱われています。しかし、信長のこれまでの戦いぶりからみて、光秀が来てすぐ諦めて死ぬなどということは考えられません。
- ◆そこで疑問を持って調べてみると、同じ言葉を見つけました

二日、戊子、晴陰、勿刻前右府本能寺、へ明智日向守（光秀）依謀叛押寄了、則時二前右府打死、同三位中將（織田信忠）妙覺寺ヲ出テ、下御所（誠仁親王御所）へ取籠之處ニ、同押寄、後刻打死、村井春長軒（貞勝）已下悉打死了、下御所（誠仁親王）ハ辰刻二上御所（内裏）へ御渡御了、言語道断之爲躰也、京洛中騒動、不及是非了

『言経卿記』

- 『言経卿記』（ときつねきょうき）は公家の山科言経による日記

- 信長は即時に討ち死に。信忠は二条御所で討ち死に。
- 言語道断のことが起きた。…「是非に及ばず」=とんでもないことだ。

- ◆「信長公記」で太田牛一は、「言経卿記」の“不及是非了”を引用したのではないか。
- ◆信長は、“仕方がない”でなく“**とんでもないことだぞ**”と言ったのです。

- ◆この記録では、信長は、攻めていたら即時に死んでいます。全然応戦などしていません。 ???

謎の三 信長は戦いもせずに死んだのか？ そうならそれはなぜなのか？

天王寺（本能寺の誤り）と称する僧院の附近に着いて、三万人は天明前僧院を完全包围した。（中略）わが聖堂は信長の所より僅に一街を距てたのみであつた故、キリシタン等が直に来て、早朝のミサを行ふため着物を着替へていた予（パードレ・カリヤンならん）に対し、宮殿の前で騒が起り、重大事件と見ゆる故暫く待つことを勧めた。その後銃声が聞え、火が上がった。つぎに喧嘩ではなく、明智が信長に叛いてこれを囲んだといふ知らせが来た。明智の兵は宮殿の戸に達して直に中に入った。同所ではかくの如き謀叛を嫌疑せず、抵抗する者がなかった。

『ルイス・フロイスの記録』

- ルイス・フロイス…ポルトガルのイエズス会宣教師。1563年来日、織田信長の信任を得て畿内・九州で布教活動。布教のかたわら、著作「日本史」を記した。南蛮寺から本能寺の変を見た。長崎で没す。
- 南蛮寺…戦国時代の京都におけるキリスト教の布教活動の拠点（教会）。正式日本名称は「珊太満利御堂上人寺」（さんたまりあしょうにんのてら）通称名の「南蛮寺」が定着。（都の南蛮寺）
- 一街＝一町？。両跡地碑の距離は約250m。
- 宮殿＝本能寺、嫌疑せず＝疑いもせず。

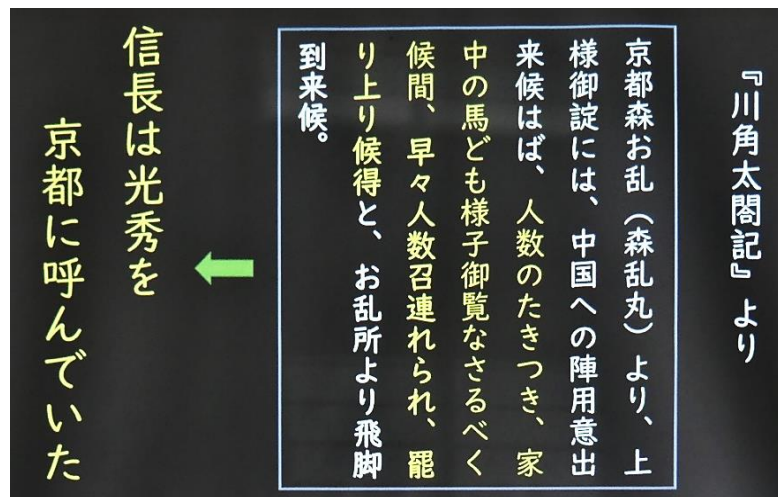
- 宮殿（寺）の中に、抵抗するものもなく直ちに入った。火の手は上がったが争ってはいない。

明智光秀が謀反を起こし、織田信長様に腹を召させた時、本能寺に私たちより先に入ったと言う人がいたら、それは真実ではありません。まさか、私たちが信長様に腹を召させるとは夢とも知りませんでした。その時は、秀吉様が備中で毛利輝元様と対峙していたので、明智さまが援軍を申しつけられたのです。京都の山崎の方向へ行くと思っていたら、逆の京都市内の方へ行くと命じられました。このときは討つ相手は徳川家康様であると思っていました。また、本能寺というところも知りませんでした。…本能寺に入る道に出ました。…門は簡単に開いて、中は、ネズミ一匹いないほど静かでした。

『本城惣右衛門覚書』

実際に「本能寺の変」に参加した明智家臣の記録

- 本城惣右衛門…戦国時代から江戸時代にかけての武士。本能寺の変に従軍。『本城惣右衛門覚書』を親族に書き残す。最晩年（江戸時代）に若い頃の経験をまとめたものと言われる。5千字ほどの文書
- 本能寺に一番先に入った。
- 信長を討つとは知らなかった。本能寺も知らなかった。
- 家康を討つとばかり思っていた。
- 門は簡単に開いて、抵抗はなかった。（軍装の兵を無防備に受け入れた。なぜ？）



(軍装で) 京都に来るように 命じていたので無警戒

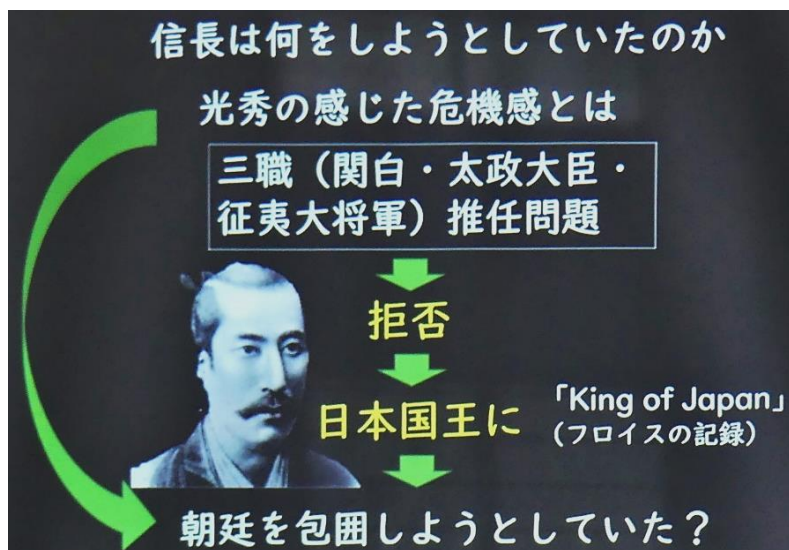
- 川角太閤記(江戸初期)...田中吉政の家臣川角三郎右衛門が書いた、秀吉と同時代の当時の武士から聞いた話をまとめた「聞書」や覚書を元にして書かれた記録書。真実性が高いとされる。
- 森蘭丸より飛脚が来て信長の命令を伝える。
- 命令＝中国出陣の用意が出来たら、軍を関兵するので、兵馬を整えて早く上洛せよ。

信長側は、光秀軍を待っていたので、抵抗もなく侵入され、信長の切腹となった。そして火が出た。(本城惣右衛門覚書に、切腹・火の手の最後まで記録がないのが残念ー編集部)

◆その後、宿舎の妙覚寺から、構えが堅固二条御所に移った信忠を攻めた。信忠は自害、御所も焼失。

光秀が信長に謀反を起こした理由は何か？

- ◆正親町天皇(おおぎまちてんのう)と信長の間に、何か摩擦が起きていたのではないかと。光秀は、そういう中で危機感を感じていました。(信長は天皇に譲位を迫っていたが、なかなか譲らなかった)
- ◆三職推任問題…朝廷から信長に征夷大將軍・太政大臣・関白のうちどれか好きな官職に任官するよう頼みました。しかし、信長はそれを受けなかった。
- ◆拒否したのは、自分は天皇より偉い、自分が日本の国王になる、ということを思っていたのではないかと。
- ◆光秀は、朝廷と信長の間を取り持って、秩序を大切にしてきた人です。こうしたことに相当な危機感を感じたのではないかと。
- ◆光秀は、信長が天皇をおろそうとしているのではないかと疑い、今回、明智の軍勢を謁見させる(馬揃えを見てもらう)という名目で、朝廷を包囲すると思ったのではないかと。(丹波亀山からの行軍のあとであり、兵馬の状態は華やかな馬揃えとはかけ離れたものであった)



馬揃え = 武家時代、軍馬を集めてその優劣や調練の状況などを検分したこと。士気を鼓舞し、併せて敵への示威の効果をねらったもの(軍事パレード)。信長は本能寺の変の前年に、正親町天皇も招待し、大規模な観兵式・軍事パレードである「京都御馬揃え」を行っている。

光秀はものすごい危機感を感じた。光秀が一番危惧したのは、天皇に向かって矢を向けること。



本能寺の変の話はこれで終わりますが、今日は皆さんにお茶の「綾鷹」を差し上げようと思ってきました。綾鷹は創業450年の歴史を誇る宇治の老舗茶舗の上林家が開発したのですが、上林家は家康ともつながりがあります。

- ①本能寺の変で三河へ戻るとき、信楽(しがらき)への家康の道案内役を務めたのが、初代上林春松の兄である上林久茂(ひさもち)ら宇治の茶師たちだった。
- ②春松の弟にあたる上林竹庵(ちくあん)は、徳川家康に仕えて、三河の土呂(とろ)郷(岡崎市)の知行権を与えられていた。
- ③竹庵は宇治に戻り、茶道を志すが、関ヶ原の戦い前哨戦である「伏見城の戦い」が起こると旧主である家康の恩に報いるべく東軍に加わり、伏見城で戦死。
- ④徳川家康は、宇治を幕府直轄の天領とし、上林家を代官に任じ、宇治茶の権利を与えた